季刊ピープルズプラン 28, Autumn 2004
2004.11.15 ピープルズプラン研究所

書評

鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二著
『戦争が遺したもの
——鶴見俊輔に戦後世代が聞く』

発行：新曜社
定価：2800円

松井隆志
戦後研究会

本書は、鶴見俊輔への三日間にわたるインタビューの記録である。そして鶴見俊輔の思想についての格好の入門書でもあろう。

聞き手であり討論相手として参加するのが、上野千鶴子と小熊英二。この二人の組み合わせはなかなか面白い。「まえがき」において小熊は、自らが思い立ったインタビューに上野を誘った理由として、上野が「慰安婦」問題や「戦後」について問題関心を持っていることと、世代的位置が鶴見と小熊の中間だったという点を挙げている。しかしそれに加えて、結果的に、二人の議論の仕方の違い（研究者としての資質の違い）が功を奏したように思う。

小熊は、鶴見のほぼすべての著作を読破し、ある意味では鶴見以上に鶴見のことを良く知っている。時に鶴見の意見を代弁しすぎる嫌いはあるが、小熊の発言が、鶴見の記憶を助け、今まで語っていない部分まで適切に誘導している。そして読者に対しては、わかりやすい解説ともなっている。一方上野は、小熊ほどには「予習」十分とは言えないものの、重要な論点だと思うところではかなりしつこく食い下がり、鶴見の「国民基金」についての判断や天皇制に対する評価など、貴重な見解を引き出すことに成功している。本書のバランスのとれた印象は、この二人の組み合わせあってこそだと言えるだろう。

周知の通り、鶴見の「回想」は、本書が初めてではない。まとまったものとしては一九九七年に出版された『期待と回想』（上下巻・晶文社）がある。『期待と回想』においては、鶴見の留学体験やプラグマティズムについての議論、そして当時ちょうど終刊を迎えた「思想の科学」についての話が中心的テーマになっている。それに比べて本書は、『期待と回想』との重複は避け、そちらではあまり大きく取り上げられていない戦争体験について詳しく聞き出している。さらに戦後における経験、特に運動との関わりについてかなりの頁を割いていることや、性についての問題まで聞いているのも、本書の貢献だ。

鶴見俊輔の人生の軌跡は、知れば知るほど独特なものだという印象を持つ。有数のエリート一家の長男として生まれ、戦前に留学して英語および当時最先端のプラグマティズム／記号論を習得。そうであるにもかかわらず、戦後は国家にも共産主義にも飲み込まれることなく、論壇だけでない、「声なき声の会」やベ平連などの運動で重要な役割を果たす。こう表面的に書き並べただけでも、このような活躍を支えた根本的な「思想」についてぜひ聞いてみたいと思うほど魅力に溢れたものであろう。本書において、そうした問いに対するひとつの回答とされているのは、鶴見における戦争体験の重さということだ。「戦争が遺したもの」という本書のタイトルは上野の提案であったようだが、「〈民主〉と〈愛国〉」の著者である小熊も、戦争体験の強調ということに異論があるはずもなかろう。しかし、戦争体験のある者全てが鶴見と同じように発想したわけではない。というより、戦争体験を教訓へと練り上げるやり方自体に「個性」があるのではないのか。そうだとすると鶴見俊輔をここまで高めた「個性」とは何であろうか。

鶴見はここに「不良少年」というテーマを答えとして呈示しているように思う。母親の折檻とそれに対して「悪」をなす幼少時の鶴見、そして戦病。鶴見は本書の冒頭でこう強調している。

「私にとっての哲学のモデルは、自分の家族関係であり、私の親父やおふくろとの関係なんだ。これはもう、私の学問の根なんですよ。それをお話ししておきたかった」。（三五頁）

おそらく鶴見自身のこうした実感に偽りはないであろう。そして事実としても、いわば非合理的とも言える幼少時に育てられた「構え」が、その後の活動や政治的判断の重要な規範となりうることは否定しない。しかし、鶴見の社会的活動の根源が、こうした「三つ子の魂」で片づけられてしまうことには、読者として不満が残る。確かにそれは「根」かもしれないが、それ以降の活動の幹や枝のあり方は、根だけが決定するものではない。

鶴見は本書において、さまざまな人物に対する感想を述べている。もとより、人物評価の好悪が全て論理的に説明できようはずもないが、中心的に動員される語彙は、「ヤクザの仁義」などの、「不良少年」という原体験に通じる評価基準である。しかし、現実の鶴見は、全てをそうした感覚的基準だけで評価してきたわけではなかったはずではないか。

本書ではたとえば三島由紀夫に好感を持っていたという話が披露されている（三四八～三五〇頁）。しかし同時に、三島の自決に対して「ものを言うのが嫌だと思った」とも述べる。そうした鶴見の判断は、おそらく政治的な「分別」であっただろう。「結局、あれはいい奴だったな」などと言って済ませてはならないという政治的感覚が、当時の鶴見の中で働いていたのではないか。小熊は、鶴見における「一途な一刻者」評価の「矛盾」を指摘し、この点に触れてはいるが（三二五頁）、「ヤクザの仁義」という用語の受容も含めて、鶴見の原体験重視の語りを、上野・小熊が素直に受け取りすぎているのではないかという印象を持つ。

先にも触れたように、戦後の社会的活動における鶴見の存在感というのは、国家と共産主義の両方からの距離を保ったまま運動への関わりを続けたことにあると私は考える（もちろんそれがすべてだと言うのではないが）。そうした位置取りというのは、「純粋な正義」への原初的嫌悪感だけでは持続させることが難しいはずだ。鶴見の価値ある距離意識を支えた「論理」を理解することこそ、鶴見とは原体験や「家系」を共有しない読者にとっては一番重要なことではないか。これはインタビューという性質上、ないも

P. 2
2004.11.18 14:02
FROM

のねだりかもしれないが、その点の追求がされきっていないことに物足りなさを感じた。

　蛇足ながら、本書に対して、事実の正確さについて疑わしい点があるという指摘も耳にした。それはあり得ることだ。「回想」に思い違いが紛れ込むことは、どんなに意識してもなかなか避けられることではない。まして何十年間ものさまざまな体験を間違いなく記憶することなど不可能ですらあるだろう。もし間違った箇所があれば、可能な限り訂正していく他はないが、そうしたことが本書の価値を減じるとは私は考えない。もちろん、まったくデタラメな「回想」は評価できないが、そういうわけでもあるまい。むしろ、本書がひとつの刺激となり、事実や評価の点で違和感を持った人たちが、それぞれの「回想」をそれぞれの立場から公表していくことになれば、後進の世代はその分だけ歴史の証言を豊かに得ることができるだろうと私は思う。

（まつい　たかし）

既刊　PPブックス

PPブックス⑤

〈じゃなかしゃば〉の哲学
ジェンダー・エスニシティ・エコロジー

花崎皋平　著　1900円＋税

〈じゃなかしゃば〉―「こんなんじゃない娑婆」というこの言葉は、80年代の水俣からオルタナティブな社会を求める世界中の人々へ届けられた。いま哲学者として、自然との共生を目指す「もう一つの豊かさ」を想起する。

PPブックス④

グローバル化と女性への暴力
市場から戦場まで

松井やより　著　2200円＋税

経済のグローバル化が世界中を覆いつくし貧富の格差を拡げ、生命さえ脅かしている今、最も犠牲を強いられているのは「女性」である。ジャーナリストとしての立場を超えて、各国地域の女性たちとつながり、その実態を明らかにする。

発行：インパクト出版会　東京都文京区本郷2-5-11　服部ビル
Tel 03-3818-7576　Fax 03-3818-8676　e-mail impact@jca.apc.org
お問い合わせ：ピープルズ・プラン研究所

時評
教育の「靖国」の現在
――反対者を「合葬」する政治的セレモニー

天野志一

一〇月二九日、私は大阪の「教育塔を考える会」の集会に呼ばれて話をした。この日は教育祭前夜集会であり、一九八六年に結成されたこの会は、大阪城公園の大手前広場の一角に高さ三〇メートルの大きな塔である教育塔と、そこで毎年行われる教育祭のあり方への粘り強い批判を今日にいたるまで持続しているグループである。教育塔については、この会の編集した『教育の「靖国」――教育史の空白・教育塔』（御花舎・一九九八年）のトップに収められた論文（「『教育の靖国神社』――教育塔の過去と現在」）は、こう語っている。

「教育塔は日中戦争前年の一九三六年に建てられ、教職員や児童・生徒が祀られ、その前で毎年教育勅語発布記念日である一〇月三〇日に行われているのが、教育祭である。戦前教育塔は『教育の靖国』として機能し、教育祭では植民地での皇民化教育ゆえに殺された教師や、自らの命を顧みず『御真影』を守るために死んだとされた教師らが祀られ、その死を賛えられた」。

教育塔は帝国教育会によってつくられたのだが、今は敗戦と占領で解散に追い込まれ、なんと戦後は天皇制軍国主義のシンボルの管理運営を日本教職員組合（日教組）が引き継いできたのである。この塔と祭がなんであるかは、第一回教育祭における帝国教育会長の永田秀次郎の挨拶（同書「資料」として収められている）によく示されている。

「惟うに教育者が其愛護する生徒を救わんが為に自ら其身を斃し或は其学業の為に職に仆れたるが如き事は全く武士が戦場に於て花々しく討死したると同一でありまして其烈々たる教育報国の精神は正に百世の亀鑑として我々を感激奮起せしめずば止まぬ所であります」。

「則ち教育塔の建設は声援不滅の教育報国の殿堂換言すれば教育招魂社の建設であって、教育祭は即ち師魂を礼賛し師道を発揚する教育的総動員であります」。

「教育報国」のための教育の「靖国」であることを自ら明

P. 3　2004.11.18　14:03　FROM